

M20231031\_02\_UCC

[UCC](#) 研究者、アルツハイマー病と腸内微生物との関係を発見

ユニバーシティ・カレッジ・コーク(University College Cork、UCC)の研究チームは、腸内微生物叢とアルツハイマー病との関連を発見した。

チームは初めて、アルツハイマー病の症状が腸内微生物叢を介して健康な若い細菌に移される得ることを発見し、病気におけるその役割を確認した。

この研究は、UCCに拠点を置く世界有数のSFI資金提供研究センター、APC マイクロバイオームアイルランドの Yvonne Nolan 教授とUCC の解剖学および神経科学部門が主導し、キングスカレッジロンドン(King's College London)の Sandrine Thuret 教授とイタリアのアンナマリアカッタネオ IRCCS Dr Annamaria Cattaneo が主導した。この研究は、アルツハイマー病が、ライフスタイルや環境の影響に特に敏感であるため、腸内細菌叢がアルツハイマー病の調査の主要な標的として出現することをサポートしている。

Brain 掲載の研究は、アルツハイマー病患者の記憶障害が、腸内細菌叢の移植を通じて若い動物に移される可能性があることを示している。アルツハイマー病患者は、糞便サンプル中の炎症促進細菌の存在量が多く、これらの変化は認知状態に直接関連していた。

Yvonne Nolan 教授は、「われわれが調査した記憶テストは、脳の海馬領域における新しい神経細胞の成長に依存している。アルツハイマー病の人の腸内細菌を持つ動物は、新しい神経細胞の生成が少なく、記憶障害があることがわかった」と話している。

「アルツハイマー病の人は通常、認知症状の発症時または発症

後に診断されるが、少なくとも現在の治療アプローチでは遅すぎる可能性がある。症状が発症する可能性のある前駆期または早期認知症における腸内微生物の役割を理解することは、新しい治療法の開発、さらには個別の介入への道を開く可能性がある」と同教授はコメントしている。